

しばらく前に、アシタノイエと名付けた自宅を建てた。その際、ヒートポンプを利用した深夜電力貯湯式の給湯器を採用した。エネルギー効率の高さに着目しての選択だった。貯湯槽は四六〇リットルで、我々の家族（当時六人）には十分と思われたが、いざ住みはじめ深夜に帰宅して風呂に入ろうとすると、湯が足りないという事態がしばしば起こる。そこで我が家のお湯の使われ方を探ってみると、部活を終えた子どもたちが長時間シャワーを浴び、就寝前には再度浴槽に入浴するといった具合で、私が風呂に入ろうとする頃にはすっかり湯が使い切られてしまうということが判明した。エネルギー効率を意識した設計だったはずが、運用上はまさに湯水のようにエネルギーを使っていたのである。もっと大きな貯湯槽とすべきだったのか、そもそも貯湯式が間違いであったのか、と一瞬悔やんだが、考えてみればそもそもお湯を使いすぎなのである。

幼き頃を思い返してみれば、祖父母と多世代同居をしていた実家では薪をくべて風呂を沸かしていた。風呂に入っている間は、誰かが風呂釜の番をしなければならぬ。もちろん自分にも番がまわってくる。入浴にあたっては誰かの世話にならねばならないし、いつでも思い立ったときに風呂に入れるわけではなかった。ボタンを押すなり電話で自動湯張りをしてくれる現在から考えると不便この上ないのだが、そのよ

各 人 各 説

## スマートライフ

首都大学東京大学院 教授

小泉雅生

Masao Koizumi



うにしてつくられるお湯だからこそ、貴重で大切なものという意識が生まれ、皆で気持ちよく入浴できるようにと気配りをしていた。また、自宅で風呂を沸かすことが困難なときは、近所の子どもたちで誘い合い銭湯に行くことも楽しみの一つであった。いつでもふんだんにお湯が使えることは便利だが、失ったものもあるように思う。

翻って、我が家のことを思えば、貯湯槽を大きくするまでもなく、子どもたちが私のために少しはお湯を残そうという気持ちをもってくれればいいだけのことである。そもそも私が皆と一緒に風呂に入れる時間に帰宅すればよいといえる。設備機器で利便性を高めることばかりを考えず、運用上の若干の工夫と配慮によって解決した方がよほどスマートなのではないか。多少の不便があることで、環境に意識を向け、自らの生活を省み、家族でコミュニケーションをとるきっかけともなる。

昨今、設計を進めていく上で、より利便性を高めるための様々な配慮や工夫が求められる。そういったことを通じて建築技術が高められる部分があるので一概に否定するものではないが、利便性を重んじるがあまり、人間の行動力や工夫がないがしろにされていると感じる部分もある。もう少し人間が賢く振る舞うことを前提としたスマートな建築のあり方もあるのではないかと、そんなことを感じる今日この頃である。